

宮沢賢治『銀河鉄道の夜』におけるオノマトペ

—日英比較対照と解釈のプロセス—

The Onomatopoeia in *Ginga Tetsudo no Yoru* by Kenji Miyazawa

—The Comparison of Japanese and English and the interpretation process—

新妻明子

NIIZUMA Akiko

キーワード： オノマトペ、日英比較対照、銀河鉄道の夜、含意解釈

Keywords: onomatopoeia, a comparison of Japanese and English,
Ginga Tetsudo no Yoru, an interpretation of implicature

抄録：

本稿では、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』の中からとりわけ独特であると思われるオノマトペを例に挙げ、日本語と英語で比較対照すると共に、独特である根拠とそれを読み手がどのように解釈するのかを分析し、そのプロセスから生じる効果について考察する。日本語のオノマトペを英語に訳す上で、言語システムの違いからその解釈が必要となる。さらに、宮沢賢治特有のオノマトペが多く見られ、その使用方法も慣習的ではないため、訳者によってそれをどのように解釈したかということを経験から読み取ることができ、差異が生じることも興味深い点である。そこで、メトニミーによる意味拡張と含意解釈プロセスの理論に基づいて、非習慣的なオノマトペの意味やその解釈のプロセスを考察し、オノマトペが読み手に与える効果の根拠を探る。

1. はじめに

日本文学において、宮沢賢治は「優れたオノマトペの使い手」や「オノマトペの達人」と称され、独自の創作オノマトペが作品の至るところに現れ、読者の魅力を引きつけている。小野編（2007）にも、「よく例にひかれるが、宮沢賢治は擬声語を実にたくみに、たくさん使っている（小野編 2007:614）。」と筆頭に挙げられている。しかし、英語に翻訳する際には、どのように訳したらよいか苦勞する日本語の特徴でもある。宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を日英比較対照しながら読み深めていくことを目的とした新妻・小野田（2015）の中でも、日英比較対照のポイントのひとつとしてオノマトペを取り上げている。受講している学生にとっても魅力的な表現として取り上げられ、興味深い指摘やコメントの多い項目となっている。そこで、授業で学生が興味を持つオノマトペの一例を挙げてみよう。

(1) a. そしてジョバンニはすぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標の形になっ

て、しばらく蛍のように、ぺかぺか消えたりともったりしているのを見ました。

- b. Then Giovanni saw the weather station pillar right behind him take on the vague shape of a triangular turret, flickering on and off like a firefly.

(2) a. ジョバンニはわくわくわくわく足がふるえました。

- b. Giovanni's legs trembled and quaked.

どちらの例も、英訳されるとオノマトペに直接対応する語句は動詞で表され、賢治独特の表現が失われてしまう。ちなみに、(1b) の flicker の意味を英和辞典と英英辞典で調べてみると、次のように記載されている。

(3) a. 〈灯などが〉明滅する、ちらちら揺れて消える (ジーニアス英和辞典)

- b. (of light or a source of light) shine unsteadily; vary rapidly in brightness (Oxford Dictionary of English)

日本語では辞書の意味にも「ちらちら」というオノマトペが使用されており、まさに日本語の特色であることがわかる。一方、英語では副詞で様態を表しており、擬態語に関しては特にそのまま英語にすることは困難であるといえる。

また、國廣編 (1982) では、オノマトペが日本語という特殊な言語の中のさらにユニークな特色であることを、次のようなエピソードで紹介している。

- (4) ある英語の堪能な日本人が、別の日本人がアメリカで交通事故にあったために、通訳を頼まれた時の話である。警察の本署で、興奮きったようすで話す同胞の日本語を、彼はとまどいをもって聞いた。このような真に迫った、描写たっぷりの話を、いったいどうやって英語に訳せばよいのだろうか。その話し方とは、次のようなものであった。

信号がチカチカしている交差点をこの日本人が車で渡ろうとしたちょうどその時、別の車がダーッと走ってきた。キーッと車を止めたが遅かりし、2台の車はガチャンとぶつかり、バンパーはべちゃんこになってしまった。日本人がドンと車のドアにぶつかると、パンとドアが開き、彼はポーンと車の外にほうり出されてしまった。ぐったりとして路上に横たわりながら、彼は、別の車のドライバーがワーワーと何か叫びながら、バタバタと彼の方に寄ってくるのを聞いた。間もなく救急車がウーウーとやって来て、ガタガタになった車は、レッカー車が、ガレージへ引いて行った。

(國廣編 (1982:113))

このようなオノマトペの使用に関して日本語と英語を比較すると、日本語の方がオノマトペの種類が豊富であり、使用頻度も高いといえる。

Chang (1990) は、日本語のオノマトペの特徴として、“their vast number, extremely subtle nuance and high context” (その数の膨大さ、ニュアンスが極めて微妙なこと、文脈依存度の高さ) を挙げており、オノマトペの果たしている機能に関しては次のように述べている (吉村 (2007))。

- (5) The role of this sound symbolism is a very important one because Japanese has a very limited number of verbs. One role of mimeses and onomatopoeia, then, is to fill in the gap and provide a means for concise expression when a sufficiently descriptive verb does not exist. They make the language vivid. They conjure up imagery instantly in the mind of the native speaker, thus producing a synaesthetic effect.

(この音象徴〔擬声語・擬音語・擬態語〕の役割は、日本語の動詞の数が非常に乏しいので、大変重要である。そこで、擬態語オノマトペ〔擬声語を voice onomatopoeia, 擬音語を sound onomatopoeia と呼ぶ〕の役割の一つは、十分に記述的に表現する動詞がない場合に、そのギャップを埋めて〔記述的な役割を担って〕簡潔に表現することができるようにすることである。それら〔擬態語とオノマトペ〕を用いることによって、生き生きとした表現になる。母語話者の心に、即座にイメージを呼び起こさせることができ、従って、共感的な効果を創り出している。(「共感覚効果」と指摘する)。

吉村 (2007:28-29)

- (6) Japanese is uniquely rich in this type of expression, which is frequently used in daily conversation, magazines and newspapers, especially for headlines, because of its brevity and power to project vivid imagery.

(日本語にはこの種の表現〔オノマトペ〕が、比類なく〔他の言語に比べて〕豊かで、日常会話や、新聞や雑誌、特に見出しで、よく使われている。それは、簡潔さと、生き生きとしたイメージを与える力が備わっているためである。)

(Ibid. :29)

宮沢賢治の作品には、共感覚による表現が多用されており、そのために共感覚者ではないかとも言われているほどである。その共感覚による表現の代表格ともいえるのがオノマトペであり、(4)からわかるように、オノマトペが多用される場合、喚情的な機能を持つと言われ、オノマトペ自体に「生き生きとしたイメージ」を与える力があると述べられている。

本稿では、宮沢賢治特有と言われるオノマトペとはどのようなものであるか具体的に分析し、それが物語の読み手にとってどのように解釈され、なぜ「生き生きとしたイメージ」を与えることにつながるのか、そのプロセスについて考察する。

2. 宮沢賢治のオノマトペの特徴

田守 (2011) は、宮沢賢治独特のオノマトペについて考察し、いくつかの法則性を見出している。ここではその法則と特有の使用法について先行研究を概観する。

2.1 宮沢賢治オノマトペの法則

宮沢賢治のオノマトペの中には、日常的に使われていないものも多数見られ、慣習的オノマトペからその一部を変化させたり、音を挿入するなどの音韻現象によって創作されたと仮定できる。田守 (2010) では、具体的に、(1) 音を変える、(2) 音を挿入する、(3) 音の位置を入れ換える、(4) 音を繰り返すという4つの法則によって慣習的オノマトペから賢治独特の非慣習的オノマトペが創作されていると述べている (田守 (2010:118-119))。そ

の法則を次のようにまとめた。

(7) 賢治オノマトペの法則一覧

- a. 法則 1 慣習的オノマトペを構成している音を別の音に変化させる。
1. 1 慣習的オノマトペを構成している子音を別の子音に変える。
- ①音をクリアにする法則・・・「がぶっ」→「かぶっ」
 - ②音を濁らせる法則・・・「かちっ」→「がちっ」
 - ③「しゃ」を「ちゃ」に変える法則・・・「むしゃむしゃ」→「むちゃむちゃ」
 - ④「によ」を「の」に変える法則・・・「によきによき」→「のっきのっき」
1. 2 慣習的オノマトペを構成している母音を別の母音に変える。
- ①「う」を「お」に変える法則・・・「むにゃむにゃ」→「もにゃもにゃ」
 - ②「う」を「い」に変える法則・・・「プルプル」→「プリプリ」
 - ③「う」を「え」に変える法則・・・「フン」→「ヘン」
 - ④「あ」を「お」に変える法則・・・「ぼくぼく」→「ぼくぼく」
 - ⑤「あ」を「い」に変える法則・・・「ばたん」→「びたん」
 - ⑥「あ」を「う」に変える法則・・・「くらくら」→「くるくる」
 - ⑦「あ」を「え」に変える法則・・・「パチン」→「ペチン」
 - ⑧「い」を「え」に変える法則・・・「びかびか」→「ぺかぺか」
 - ⑨「い」を「あ」に変える法則・・・「どきどき」→「どかどか」
 - ⑩「い」を「う」に変える法則・・・「ピリリ」→「ピルル」
 - ⑪「お」を「あ」に変える法則・・・「ゴツゴツ」→「ガツガツ」
 - ⑫「お」を「え」に変える法則・・・「コホン」→「ケホン」
 - ⑬「え」を「あ」に変える法則・・・「べたっ」→「ばたっ」
1. 3 慣習的オノマトペを構成しているモーラを別のモーラに変える。
- ①「び」を「ど」に変える法則・・・「びしゃっ」→「どしゃっ」
 - ②「きゅ」を「き」に変える法則・・・「キュッキュッ」→「キッキッ」
- b. 法則 2 慣習的オノマトペに音を挿入する。
2. 1 「っ」(促音)挿入の法則
「ピカリピカリ」→「ピッカリピッカリ」
2. 2 「ん」(撥音)挿入の法則
「ぐにゃり」→「ぐんにゃり」
2. 3 母音挿入の法則
「くらりくらり」→「くうらりくらり」
2. 4 モーラ挿入の法則
「ちゃらんちゃらん」→「ちゃらんちゃらん」
- c. 法則 3 慣習的オノマトペを構成している音の位置を入れ換える。
「こっそり」→「そっこり」
- d. 法則 4 慣習的オノマトペの語基を反復させる。
「くつつ」→「くつつつつ」

(田守 (2010):119-121)

このような音韻現象の多様性によって、慣習的なオノマトペとは異なる独自のオノマトペを創り出しているのである。

2.2 宮沢賢治特有のオノマトペの使い方

田守（2011）では、宮沢賢治の作品において、慣習的なオノマトペに関してもその使い方が通常とは異なると分析し、宮沢賢治のオノマトペがなぜユニークであるか明らかにしており、賢治特有のオノマトペの使い方を次のように分類している。

(8) 賢治オノマトペ特有の使い方

- ①通常使われない動詞と一緒にしたもの
- ②通常一緒に用いられている動詞と正反対の意味の動詞と一緒に使われるもの
- ③通常使われない名詞（主体）と一緒にしたもの
- ④通常使われない名詞（対象）と一緒にしたもの
- ⑤通常使われない名詞および動詞と一緒にしたもの
- ⑥比喩的に使ったもの
- ⑦動詞として使われるもの
- ⑧様態副詞のオノマトペを結果副詞的に使ったもの
- ⑨動詞が省略されたもの

（田守（2011）:29）

賢治のオノマトペが独特であると思われる要因として、特に、既存のオノマトペでも通常とは異なる使い方をしてることが明示されている。

3. 日英語比較対照

青木（2003）は、宮沢賢治の短編を素材にし、作品の原文に表れる 1068 例のオノマトペとその英訳文を比較対照しており、そのうち、『銀河鉄道の夜』のオノマトペは 186 例挙げられている。しかし、新妻・小野田（2015）において複数の英訳文を比較対照したところ、訳者によって大きく異なる例もあり、オノマトペが日本語のユニークな特徴と言われる所以や訳者の解釈が表れているといえる。そこで、さらに複数の英訳と比較対照することによって、宮沢賢治の独特なオノマトペの使い方が与える効果や、日本語と英語の言語的特徴の差異について、より詳細に分析することを試みる。

本章では、青木（2003）の分析による 186 例のオノマトペの中から、小野編（2007）『日本語オノマトペ辞典』に掲載されていない 3 例¹ (9)～(11)と、授業の受講生から特徴的であると指摘の多い 2 例(12)～(14)を取り上げる。英語訳は次の A から E の訳者による 5 冊から引用し、以下、例文の引用元を便宜上 A ～ E の記号で表記する。

¹ 田守（2010）の賢治オノマトペの法則から考慮すると、音変化によって通常のオノマトペから変化したことによって辞典に掲載されていないと指摘できるが、ここではすべてのオノマトペを分析することはできないため、便宜的な基準として辞典の掲載の有無を利用した。

- A. John Bester (宮沢 (1992))
- B. Joseph Sigrist and D. M. Stroud (Miyazawa (2009))
- C. Roger Pulvers (宮沢 (1996))
- D. Sarah M. Strong and Karen Colligan-Taylor (宮沢 (2002))
- E. Yoko Toyozaki and Stuart Varnam-Atkin (宮沢 (2005))

(9) 天の川がしらしらと南から北へ亘っているのが見え、……

- A. he could see the Milky Way stretching *whitish* from south to north, …
- B. he saw the *brilliant* white Milky Way stretching from south to north.
- C. …with the Milky Way, *soft and blurry white*, streaming from south to north.
- D. He could see the Milky Way stretching *with a soft white* light from south to north, …
- E. He could see the *white* Milky Way. It went all the way from the south to the north.

「しらしら」は「白白(しらじら)」と同義であり、辞典によると「夜が明けて次第に空が明るくなっていくさま。」という意味である。A, C, Dではぼんやりとした穏やかな白さと表現しているのに対して、Bでは鮮やかな白さとして表現している。また、C, Dで使われている“soft”は共感覚による表現であるといえる。「しらしら」とはどのような様子なのか、訳者のイメージの違いが表現に表れている。

(10) びしゃぁんという潰れたような音が川下の方で起こって……

- A. …a *squelching* sound came from farther down the river, …
- B. …there was a *dull thudding* sound in the river valley.
- C. …an *earsplitting* crash was heard downstream, …
- D. …from further downstream, came the sound of something going *splat*.
- E. …a *strange wet* kind of sound from downstream.

「びしゃん」という慣習的オノマトペにモーラ「ぁ」を挿入するという賢治の法則(7b)によるものであると考えられる。「びしゃん」とは、「①平らなものを手荒く打ち合わせたときの高く鋭い音。たたかれたように、平べったくなったさま。②液体などが小さくはねる音。また、そのさま。」(小野編(2007:361))と定義されているのに対して、対応する英訳では、A. “squelch”「たたきつぶす、べちゃんこにする」、B. “dull thudding”「低いドスンと落ちるような」、C. “earsplitting crash”「耳をつんざくようなすさまじい音」、D. “splat”「ピシャと」、E. “wet”「湿った」というようにどれも異なった印象を伴う表現となっている。

(11) それから彗星がギーギーフーギーギーフーて云って来たねえ。

- A. Then a shooting star came along *blowing and wheezing*---
- B. And along came a shooting star---*woosh! Woosh!*
- C. And the comet came *whooshing by. Whoosh! Whoosh!*

- D. And then a comet came by *huffing and puffing*.
 E. A comet came along going *GEE-GEE-FU, GEE-GEE-FU*...

おそらくこのオノマトペを聞いただけで、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』の一節だと思い出せるほど印象に残るオノマトペであると思われる。慣習的オノマトペとして「ぎーぎー」と「ふー」は認められるため、賢治の法則(7b)と(7d)に基づいてその2つを合わせたものかもしれないと仮定する。小野編(2007)では、「ぎーぎー」は、「①ものが盛んにきしんで出る大きめにぶい音。また、それに似た音や声。②追いつめられて弱りはてるさま。」(小野編(2007:59))、「ふー」は「①風の吹く音。強く息を吹き出したり、ため息をつく音。またそのさま。②音もなく急に動くさま。」(小野編(2007:388))と定義されており、この2つの音や様子を合わせたものかもしれないと想像することができる。しかし、賢治オノマトペ特有の使い方(8)③に当てはまるように、「ぎーぎー」というオノマトペは彗星という名詞と使われることはないと思われる。このように、2つに分解して考えても独特であることがわかり、「ギーギーフーギーギーフー」というまとまりとしてどのように解釈するかは読み手次第であるといえる。

英訳では、A. “blow” 「ヒューヒュー音を立てる」、 “wheeze” 「ぜいぜい息をする」、 B. “woosh”, C. “whoosh” 「ヒュー、シャーという音」、 D. “huff” 「ヒューヒュー吹く」、 “puff” 「ぱっと吹く」という音として表現され、 E では英訳されずにそのまま使用されている。

- (12) ぺかぺか消えたりともったりしているのを見ました。
 A. it *glimmered* on and off indistinctly…
 B. it *flickered* off and on…
 C. Then Giovanni saw……, *flickering* on and off…
 D. he watched as it *pulsed* on and off…
 E. it *flickered* on and off
- (13) 青くぺかぺか光ったり消えたりしていましたが・・・
 A. they *flashed* blue, on and off…
 B. *flashing* on and off…
 C. *flickered* blue, on and off…
 D. *flickering* on and off with a bluish light…
 E. The herons *gleamed* blue…on and off, on and off.

(12)は天気輪、(13)は鷺の様子を表しており、「びかびか」を「ぺかぺか」に変えるという賢治の法則(7a)に当てはまる。英語では、“glimmer” 「ちらちら光る」、 “flash” 「びかっと光る」、 “flicker” 「明滅する」、 “gleam” 「(かすかに・鈍く・白く) 光る」、 “pulse” 「脈打つ」の動詞で表されている。賢治の法則(7)で分析されているような音韻現象による創作を、そのまま英語に反映することはできないため、英訳だけ読んでいても賢治の独自性は味わえないように思われる。

(14) ジョバンニはわくわくわくわくわく足がふるえました。

- A. Giovanni's legs trembled *violently*.
- B. Giovanni's legs were shaky and trembling.
- C. Giovanni's legs trembled and quaked.
- D. Giovanni's knees shook.
- E. Giovanni's legs were shaking.

賢治の法則 (7d) によって「わくわく」を反復させ、(8)⑤の使い方によって非慣習的であるとみなされる。「わくわく」とは「①興奮や不安で心がゆれて落ち着かないさま。②こきざみに増えたり広がっていくさま。」(小野編 (2007:504-505)) という意味があり、「私は寂しさにわくわくした (①)」、「わくわくと流れ出る涙 (②)」のように使われる。しかし、「足」という名詞や「ふるえる」という動詞と共に使われるとは考えられないため、読み手にとっては印象的な表現であると感じられると思われる。英訳ではそのような反復を B や C のように同義語の反復によって表現しているが、やはり賢治独自の表現を英語で表現するのは困難であることがわかる。

ここまで見てきた 5 例だけでも、賢治の独自性が表れていることや、それを英語に翻訳する際の解釈や表現に差異が生じることが明らかである。『銀河鉄道の夜』には 186 例のオノマトペが使用されていることから、読み手は、物語全体を通してオノマトペによって表現されている様態や音の世界をどのように解釈するかという行為に労力を費やすことになると考えられる。次章では、このように独特なオノマトペは読み手にどのように解釈され、なぜ読み手に「生き生きとしたイメージ」を呼び起こすことになるのかということに関して分析を試みる。

4. オノマトペの意味拡張と解釈のプロセス

4.1 オノマトペのメトニミー的意味拡張

前章で取り上げたような非慣習的なオノマトペに関して、井上 (2013) は、次の例文(15)の「ばしゃばしゃ」というオノマトペを新奇なオノマトペとして取り上げている。

(15) 間もなく地面はぐらぐらとゆられ、そこらはばしゃばしゃくらくなり、象はやしきをと
りまいた。(宮沢賢治『オツベルと象』) (井上 2013:209)

「ばしゃばしゃ」は、慣習的には、水面を立て続けにたたいたり、水がものに打ち当たって飛び散ったりする音や様子を表す表現として用いられるが、(15)では様態を表す擬態語として使われている。賢治オノマトペ特有の使い方(8)①に当てはまり、「くらくなる」という動詞と共に使われることはない上に、「ばしゃばしゃだ／している」という擬態語用法は容認されない。しかし、「特定の音 (例えば、水が立てる音) と、そうした音の発生に伴う様態 (例えば、水が勢いよく揺れ動く様子) を含意するため、それらの含意のうち様態が焦点化された擬態語用法へとメトニミー的に拡張する」(井上 (2013:210-211)) というプロセスを経て意味拡張していると考えられ、その場合、慣習化の度合いが低く文脈による解釈が大きいいため、新奇な用法であるとしている。そして、新奇な用法への意味拡張のプロセスを図 1 のよ

うに図示している。

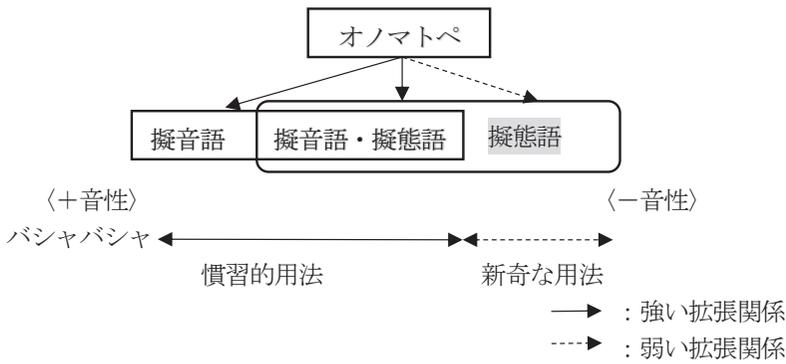


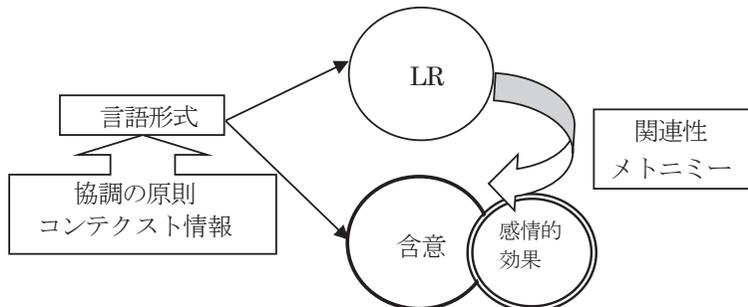
図1 「新奇な用法への拡張

井上 (2013:210)

このように、オノマトペがメトニミーによって意味拡張されると分析することによって、慣習的な用法から逸脱しているものであっても文脈等に応じて解釈が可能であるといえる。前章で取り上げたオノマトペは、その用法が慣習的な用法から逸脱しているだけではなく、オノマトペ自体にも、本来の形式に何らかの変化が加えられている。しかし、動作主体となる名詞や動作などの文脈や、本来のオノマトペからの拡張されたものであるという類推を伴って、読み手が文脈に応じた解釈を行うと予想することができる。

4.2 非慣習的オノマトペの解釈のメカニズム

前節でオノマトペも意味拡張されることが分析されたが、その解釈のメカニズムとはどのようなものなのか。本節では、新妻 (2010) で提案した含意解釈のモデルが非慣習的オノマトペの解釈にも適応できるか考察する。新妻 (2010) では、Grice (1975) と Morgan (1978) の2つの理論を組み込むという提案をした内田・前田 (2007) を基に、含意解釈のメカニズムについて次のようなモデルを示している。



新妻 (2010:29)

図2 特殊化された会話の含意—即時的パターン

図 2 中の LR とは literal reading の略であり、「文字通りの解釈」という意味である（以下、LR とする）。Grice (1975) の理論では、特殊化された会話の含意 (particular conversational implicature) の解釈は格律の無視と協調の原理の相互作用に始まり、それに続くコンテクスト化はコンテクスト情報に基づく推論過程をへて行われる。オノマトペが慣習化された使い方と異なって使われた場合、この特殊化された会話の含意を即時的に解釈するプロセスと同様であると考えられる。次の例を見てみよう。

- (16) ごとごと鳴る汽車のひびきと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧くような音が聞えてくるのでした。(宮沢賢治『銀河鉄道の夜』)

田守 (2010) によると、『ころんころん』は典型的には丸いものが連続的に転がる様を表すのに用いられ、水が湧くような音を描写するのに用いられることはない。しかしながら、『ころんころん』には擬音語としての意味もあり、琴やピアノ、鈴などの軽やかで明るい涼やかな音色を描写するのにも用いられる。」(田守 (2010:143-144)) と述べられており、ここでの言語形式はオノマトペということになり、LR は軽やかで明るい涼やかな音色であるといえる。しかし、水が湧く音には用いられないという点で、協調の原則における関係の格律²に違反していると考えられる。そこから含意が生じ、「ころんころん」という「音」であるという描写から、琴やピアノの音が焦点化される。このメトニミーにより、「ころんころん」という水の音を想像し、解釈することになる。そして、会話における即時的な解釈パターンには感情的効果が伴うことと同様に、物語の解釈における感情的効果とは、読み手に生き生きとしたイメージをもたらし効果や、水の音をより具体的に想像しようとする行為を指すと考えられる。

次に、例文(17)のように、オノマトペそれ自体が賢治の法則によって創作されたものである例を見てみよう。

- (17) 「そうじゃないわよ。あのね、天の川の岸にね、おっかさんお話をうたったわ、……」
「それから彗星がギーギーフーギーフーて云って来たねえ。」 (= (11))

まず、「ギーギーフーギーフー」という表現自体が協調の原則に違反していると考えられる。創作されたオノマトペであるので当然かもしれないが、質・量・関係・様態の格律すべてを無視しているといってもよいであろう。しかし、オノマトペという言語形式から推論によって「ギーギー」と「フー」という2つのオノマトペを導く可能性がある。その場合、ものが盛んにきしんで出る大きめにふい音を表す「ギーギー」は、彗星の音とは考えられず、関係の格律を無視していることになるが、「フー」は、風の吹く音や、音もなく急に動くさまを表すため、言語規約的解釈が可能である。その場合、新妻 (2010) における解釈パターンのモデルは図 3 のように示される。

² 関係の格律は発話が常に会話の当面の話題と関連をもつべきであることを示した行動指針である (内田・前田 (2007:153))。ここでは説明文を状況を説明している発話であるとみなし、物語中に使われているオノマトペを含んだ文であると分析する。

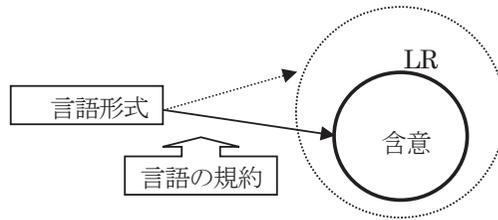


図3 言語規約的含意

新妻 (2010:29)

読み手は「ギーギー」、「フー」というオノマトペの含意から「ギーギーフー」というオノマトペで表現される彗星の様態を連想し、それによって感情的効果も生じると考えられる。このように、物語の読み手が通常使われない用法に直面した場合、書き手が伝えようとしていることを解釈しようと推論が働くと考えられ、そのような作用の結果として感情的効果を生み出しているのではないだろうか。

また、スコウラップ (1993) は、オノマトペが多用される談話の特性を喚情的な機能であると概括し、次の4つの特性を挙げて説明している。

- (18) ① Informality (インフォーマルな談話) 改まったことばとは負の相関関係にあり、直接的で、個性的で、感情表出的である
- ② Ostentatiousness (注目を引くような談話) 鮮明さと実演性がある
- ③ Condensation (意味が簡潔に凝縮された談話) 詳細な情報を即座に提供できる
- ④ Concreteness (具体性を有する談話) 五感で感じ取られるような性質を持つ

(スコウラップ (1993) :94-97)

物語の語りの部分や談話においてオノマトペが用いられることによって、このような喚情的な機能が作用し、さらに宮沢賢治独特の使い方によって、読み手はその含意を解釈することに労力を費やすことになる。それゆえ、人間の感覚的・心理的側面に働きかけ、「生き生きとしたイメージ」を与えることになると考察する。

5. まとめ

本稿では、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』の中からとりわけ独特であると思われるオノマトペを例に挙げ、日本語と英語で比較対照すると共に、独特である根拠とそれを読み手がどのように解釈するのかを分析し、そのプロセスから生じる効果について考察した。日本語のオノマトペを英語に訳す上で、言語システムの違いからその解釈が必要となる。さらに、宮沢賢治特有のオノマトペが多く見られ、訳者によってそれをどのように解釈したかということが英語の表現から読み取ることができるが、そこには差異が生じることが明らかとなった。そこで、非習慣的なオノマトペの意味やその解釈に関して、メトニミーによる意味拡張と含意解釈のプロセスに基づいて考察することを試みた。宮沢賢治特有と言われるオノマトペは非慣習的と言われているが、慣習的なものからのメトニミーによる拡張であると考えること

が可能であり、その関連性を見出す労力が感情的効果を生じる一因として考えられるのではないだろうか。また、賢治独特の表現と称されるのは、本来の表現から逸脱しすぎず、一定の法則を持ち、読み手が解釈できる程度の関連性を保っているからであるともいえる。

また、物語の中でのオノマトペの解釈であるため、コンテキストが必要不可欠となる。本稿では物語の書き手と読み手を発話の話し手と聞き手に対応させ、コンテキスト情報と協調の原理、そして会話の格律による相互作用を通じて含意が解釈されるというプロセスを分析してきたが、物語におけるコンテキストとは、読み手が頭の中の情報の一部分を活性化させたもので、心理的なものであると主張する Sperber and Wilson (1995) による関連性理論に基づいた分析の方が適している可能性もある。関連性理論によると、読み手は想定全体からコンテキストをいい加減に選んでいるのではなく、コンテキスト選択という原則に従って選んでいるのである (Sperber and Wilson (1995:137:138))。その点から、物語のコンテキスト情報にも注目する必要がある、物語における談話分析が会話の含意解釈パターンに適用できるかどうかという問題や、オノマトペの創造性に関して、宮沢賢治のような一定の法則や制約があるのかという問題は、今後の課題である。

【引用文献】

- 井上加寿子 (2013). 「オノマトペの多義性と創造性」 篠原和子・宇野良子編 (2013), 203-216.
- 内田恵・前田満 (2007). 『語用論—英語学入門講座・第 11 巻』東京：英潮社.
- 小野正弘編 (2007). 『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』東京：小学館.
- 笈壽雄・田守育啓編 (1993). 『オノマトペ・擬音・擬態語の楽園』東京：勁草書房.
- 篠原和子・宇野良子編 (2013). 『オノマトペ研究の射程—近づく音と意味』東京：ひつじ書房.
- スコウラップ, ローレンス (1993). 「日本語の書きことば・話しことばにおけるオノマトペの分布について」 笈・田守編 (1993), 77-100.
- 國廣哲彌編 (1982). 『日英語比較講座 第 4 巻 発想と表現』東京：大修館書店.
- 田守育啓 (2010). 『賢治オノマトペの謎を解く』東京：大修館書店.
- 田守育啓 (2011). 「宮沢賢治特有のオノマトペ—賢治独特の非慣習的用法—」『人文論集』第 46 号, 15-30.
- 新妻明子・小野田貴夫 (2015). 『銀河鉄道の夜と Milky Way Railroad』静岡：篠原印刷所.
- 新妻明子 (2010). 「会話の含意解釈パターンと推論仮定の認知モデル—Grice と Morgan の理論に基づく分析から」『常葉学園短期大学研究紀要』第 41 号, 25-40.
- 吉村耕治 (2007). 「色彩語を含む共感覚表現に見られる日英語の文化的相違—共感覚現象の意味・日本語オノマトペの状況中心性—」『関西外国語大学研究論集』第 86 号, 19-37.
- Chang, A. C. (1990). A Thesaurus of Japanese Mimesis and Onomatopoeia: Usage by Categories (『<和英> 擬態語・擬音語分類用法事典』) 東京：大修館書店.
- Cole, P. (ed.) (1987). *Syntax and Semantics 9: Pragmatics*.
- Cole, P. and Morgan, J. L. (eds.) (1989). *Studies in the Way of Words*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Grice, P. H. (1975). "Logic and Conversation," in P. Cole and J. L. Morgan (eds.), 41-58.
- Morgan, J. L. (1987). "Two Types of Convention in Indirect Speech Acts," in P. Cole (ed.), 261-280.

Sperber, D. and Wilson, D. L. (1995). *Relevance*. Oxford: Blackwell.

【使用した翻訳本】

Miyazawa, Kenji. (Sigrist, Joseph and D.M. Stroud.) (2009). *Milky Way Railroad*. Stone Bridge Press.

宮沢賢治（ロジャー・パールバース訳）(1996).『英語で読む銀河鉄道の夜』筑摩書房

宮沢賢治（ジョン・ベスター訳）(1992).『銀河鉄道の夜 Night Train to the Stars』講談社

宮沢賢治（とよぎきようこ、ステュウットA ヴァーナム-アットキン訳）(2005).『The Night of the Milky Way Train 銀河鉄道の夜』IBC パブリッシング

宮沢賢治（サラ・ストロング、カレン・コリガン-テラー訳）(2002).『Masterworks of Miyazawa Kenji 「英文 宮沢賢治傑作選」』サンマーク出版

